目次

はじめに……4

Ⅰ ことばから迫る能（謡曲）論　小林千草

第一章　未来の豊かな日本語像と能のことば……8
第二章　ことばから見た能の構成――「暫く」の語が演出する能の世界――……19
第三章　「関を上ぐ」と「たいさんぼく」――能狂言と中世文献の有機的結合――……30
第四章　太閤秀吉と能――中世資料（史料）との照合の楽しさ――……50
第五章　ヨーロッパに伝わった能のことば――ロドリゲス『日本大文典』を中心に――……59
第六章　ハビアン『平家物語』「屋島〈那須与一・弓流し〉」の段と能
――中世における〝語り〟の共有性――……82
第七章　金春安照のことばと表現……119
第八章　しぐさがセリフを超える時――能狂言に見る演劇の〝翻訳〟――……127

Ⅱ 能（謡曲）鑑賞の新視点　千草子

第一章　能にみる御仏への讃歌――能の精神世界――……146
一　「百萬」「三井寺」「隅田川」などに見る〝母の心〟……146
二　「鵜飼」「善知鳥」「江口」に見る〝罪〟の意識……159
三　「源氏供養」「誓願寺」「姨捨」に見る〝女人往生〟……172
第二章　能「善知鳥」とワキ方の役割……188
第三章　金剛旧能楽堂から新能楽堂へ――伝統文化の新生に立ち会う――……200
一　旧能楽堂で「橋弁慶」を観る……200
二　宗家継承披露能を東本願寺能舞台に観る――「安宅」鑑賞日記――……209
三　〝室町の金剛はん〟から世界の金剛流へ――「扇葉荘」で新生を想う――……220
四　金剛能楽堂いよいよ舞台披きへ――京の新名所へ期待感いっぱい――……226
五　新能楽堂落成披露能を観る――「翁」鑑賞日記――……228
六　新金剛能楽堂に期待するもの
――四〇〇年前ヨーロッパに伝わった能の再現――……236
第四章　丹波夜能「雪」「土蜘蛛」と篠山城下町――地域社会に生きる能――……243
第五章　能（謡曲）を楽しむ――能万華鏡――……259
一　「竹生島」と信長……259
二　「卒都婆小町」(一)――現代性帯びた「中間」――……261
三　「卒都婆小町」(二)――〝心の花のまだあれば〟――……263
四　翠子と「百萬」――母性から母性へ――……265
五　「道成寺」に想う……271
六　東海大学欅能と能「敦盛」――〝平和への祈り〟聞こえますか――……275
七　女流能楽師のための能会パンフレットより
――「清経」「鉄輪」「大瓶猩々」など――……277

Ⅲ　能狂言（能楽）の現在

第一章　インターネット社会と能楽師・能楽ファン……小林千草　284
第二章　学校教育と能狂言、社会教育と能狂言――ことばの力、声の力を信じて――……千草子　299
おわりに……307
あとがき……314
〈巻末付録〉能（謡曲）の基礎知識と発展課題……318～327

第一章　未来の豊かな日本語像と能のことば

一　声と音と文章の世界を探る――子どもの絵日記、能の謡いから――

子どもの文章と音の世界

音の世界を描く、やさしそうであるが、小学生の作文を見ると、意外な事実に出くわす。視覚は、わが心のおもむくままにフル稼働し、それを自分の歩みにつれて〝遠〟から〝近〟にカメラワークよろしく描写していく。たとえば、H児の小学二年生四月の絵日記は、次のようになる。

せき川のちかくへ、田やはたけのようすを見に行きました。／せき川のていぼうでは、のうかのおばさんが三人はたけをたがやしていました。／はたけには、ねぎ、なっぱ、大こん、すいせんなどが、うわっていました。／おばさんは、くわで土をたがやしていました。／田んぼは、水がなく、くさがいっぱいはえていました。／田んぼには、はたらいている人は、一人も見えません／まだきょ年いねをかりとったあとのきりかぶがそのままになっていました。／白い花がさいていました。／はるになったのでかえるが田んぼにいました。／ていぼうをけずって川をひろくしているシャベルカーがありました。

ここでは、おばさんの土をたがやす鍬の音や、堆積した川砂や土砂をとりのぞくシャベルカーの音を聞いたであろうが、ことばとなり、文章となって固定されてはいない。それから数日後の作文でも、

／こううんきは、みぞのふかいタイヤが四つあり、人がのれるようになっています。／こううんきのうしろに、まがったほうちょうのようなはがたくさんついたぼうがあり、それがぐるとまわって土をほりおこすのです。／おじさんは、それにのって、ゆっくりとたがやしていきます。／一かいに、一ひろくらい、きりかぶで三つずつたがやしていきました。

など、視覚描写はかなりこまかいのに、大きな音であったろう耕耘機のつくりだす音の世界は、無色である。本人の興味は、つづく文「ほりおこされた土をこねこねしたらねんどみたいでした。」でわかるように、手ざわり――触覚にすでに移っている。

音の世界を文章にすると

幼児期より、絵本やアニメーション、母親たちの読みきかせで、擬声語・擬態語（オノマトペ）は洪水のように体験しているにかかわらず――もちろん、擬声擬態語は、小学一年次にもかなりよく使